

[研究ノート]

トリックスター試論（1）

——影の統合におけるトリックスター元型の役割——

葉山大地

- 〈目次〉
1. 現代社会と制約
 - 1.1 鎖に縛られる自己（セルフ）
 - 1.2 社会化による自己の疎外
 - 1.3 本論文の試み
 2. 物語に登場する人物としてのトリックスター
 - 2.1 世界のトリックスター
 - 2.2 トリックスターの特徴
 3. トリックスター元型
 - 3.1 元型
 - 3.2 影の統合
 4. 影の統合におけるトリックスターの役割
 - 4.1 中間領域
 - 4.2 トリックスター元型の役割に関する仮説
 5. まとめ

1. 現代社会と制約

1.1 鎖に縛られる自己（セルフ）

私たちは、ありのままに自由に生きたいという欲求を本質的に持っている。ありのままの自分とは、本能的欲動レベルのものから、より高次の純粋な自己実現的欲求や信念、願いなども含まれ、「自己 (self)」と呼ばれる。自己と類似の概念に「自我 (ego)」が挙げられる。自我は、思考などの精神活動を行う主体であり、通常「私」として意識できる精神的な領域である。

自己が意味する、自由に生きるということは、本能のままに生きることだけを意味するのではなく、自分自身が真に望む生き方をすることまでも含む。自分の感情や欲求に開かれることをロジャーズは、「自己一致」と呼んでいる。「本来性 (Authenticity)」と呼ばれることもある。本来性を感情的側面から捉えた概念が、「本来感 (Sense of Authenticity)」であり、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」(伊藤・小玉, 2005)と定義される。ユングは、さらに自己を大きく捉え、自己はこころの全体性を司るものであり、こころの中心であると述べている。自己の最重要な特徴は、それが「もろもろの対立の結合」(Jung, 1944, 池田・鎌田訳, 2017)であり、善一悪、男性性一女性性、感情一思考など全ての要素を含むものである。

このように、自己が含まれる範囲は各理論で異なるが、自己とは、非常に広義の表現をするとすれば、その個人にとって「たましい」とも言うべき重みをもつものである。その個人が、自己の望むまま、ありのまま本来的に生きられるようになることは、心理療法における最大の命題の一つといえる。

現代社会は、個人主義 (individualism) や自由主義 (liberalism) が強調されており、個人は自分自身の選択によって生き方や行動を選択することが望ましいとされる。しかし、私たちは多くの決まりごとに囲まれる「多重制約

社会」の中に生き、大小の様々な行動基準に従っている。大きく法的基準（憲法、刑民法、国民義務など）、文化的基準（宗教、慣習、社会的規範、伝統など）、社会的な基準（道德観、性役割、マナー、契約、マニュアルなど）、家族的基準（しつけ、期待、家訓）に分けられる。

これらの行動基準は、人々が文化的・社会的な生活を送るために作り上げられた非常に重要な機能を有する。私たちは、憲法に基づく立法の中で国民としての義務として労働や納税を果たしながら、住む地域や生活環境において様々な慣習や伝統を守りながら生きる。教育の過程で、義務教育や高等教育の中で社会的存在として望ましい道德観を身に着けると同時に、「男性」「女性」という身体的相違を引き受けている。また、生活の中で、その社会において受け入れられる服装や言動などを形作っていく。

その一方で、多くの人間は、こうした制約の中で自分自身の真の欲求や信念を隠しながら生きていかざるをえないのが実際である。外的に課されるルールや規範に従うことは、自律的に生きるという自由を放棄する一方で、他者に受け入れられやすいなど社会的適応においては望ましいことであるため、自我（私）によって選択されやすく、その結果、ありのままの自分を表現する機会を自ら手放していく（Figure 1）。こうした点について、フロム

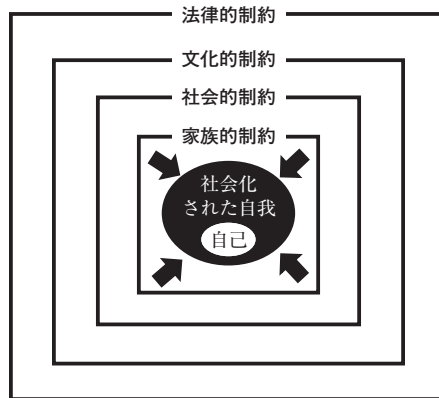


Figure 1 社会的制約の多重性

は、その著書「自由からの逃走」において、人は他人の期待から外れることを非常に恐れるため、世論や常識の力は非常に大きいことを指摘している (Fromm, 1941, 日高訳, 1956)。自立することによって個人に孤独感や不安が生じるため、それを避けるために個人は自由を放棄する。フロムは、それを疎外された自己の問題として論じたのである。

1.2 社会化による自己の疎外

私たちは、様々な行動基準や規範を内的に取り入れ (内在化) しながら、社会に適応できる「私」(意識の主体としての自我) を作り出す。教育は、これらの行動基準や規範を成長とともに身に付けていくための、社会化のための活動の1つである。家族でのしつけや教育に加えて、義務教育や、大学や専門学校等の高等教育は社会化を促す機能をはたしている。

これまで様々な心理学者や精神分析家が社会化されるプロセスを論じている。たとえば、フロイトは、超自我 (super ego) を心の一部として理論化している。超自我とは、無意識の検閲システムであり、社会的に受け入れられない願望や欲求を無意識内にとどめる役割を果たす。また、フロムは、権威主義的傾向として、支配者や制度などに服従する傾向を定式化した。

私たちは、外的な制約に従うだけでなく、自らによって内的な制約を作り出すこともある。たとえば、ロジャーズは、「自分はこうあるべき」「こうありたい」という自己像を持つことを論じ、これを理想自己 (ideal self) と呼んだ。私たちは理想自己を満たしていると自己認識できる認知的枠組みを作る。認知行動療法ではスキーマ (schema) と呼ばれ、スキーマには、「こうあるべき」という信念と自動思考が含まれる

こうした自らが作り出した心の中の制約は社会適応のための原動力となるが、それが過剰であれば、不適応状態となる。例えば、フロイトは、超自我 (現実原則) によって自らの欲動であるエス (エロス, タナトス) は弱められることで、神経症が出現すると論じている (Frued, 1923)。また、ロジャーズによれば理想自己と食い違う現実自己は否定され、自己不一致の状態に陥

ることが指摘されている。換言すれば、「こうあるべきだ」という信念によって自己否定が進行する危険性があるのである。加えて、フロムが論じたように、私たちは他者の価値観や要求に縛られることを望み、自分からその自由を放棄することがある。社会化が上首尾に進むほど、自己の疎外が生じ、私たちは本来の自分を失っていく危険性も高まると言える。

社会で生きていくための制約が多くなり、その制約を真面目に守ろうとするほど、その個人は生きづらさや窮屈さが増し、時には悲劇的な結末を迎える。たとえば、ロジャーズは、「エレン・ウェストーその孤独」で、ある女性の悲劇を紹介している (Rogers, 1961, 伊東・村山監訳, 2001)。エレンは、父親思いであり、少年のようなはつらつとした女性だった。エレンは外国人と婚約をするが、父親の反対で婚約は破棄され、そのショックから過食状態に陥ってしまう。その後、24歳で別の学生と恋に落ち結婚を望むが、再度親の反対にあい、再び婚約を破棄されてしまう。自己への信頼を失ったエレンは極度の拒食に陥り、エレンは多くの精神分析家の分析を受けるが「分析家は認識を与えるが、癒しがありません」という言葉を残し、32歳の時にたっぷりの食事をしたのち、自殺をした。エレンにとって本来的な自己とは、自分が望んだ相手と結婚したいという愛情であり、女性らしい生き方・体形でいたいという願望である。その願望は、親の価値観によって否定され、矮小化された真実の自己であったのだ。

1.3 本論文の試み

自我が社会化されていくことは、社会的な生活を送る上で不可欠であるが、自己を生かすことも精神的な健康を保つうえで欠かすことはできない。「ありのままの自分」を開放できるようになるためには、自分を縛る内外の制約から適度に「自由でいられる (逃げられる)」ことが必須である。多重制約社会の現代においてこそ「制約から自由でいられる (逃げられる)」ことは、精神的な健康を維持する上で重要なテーマとなる。ここで述べている、心の中に自由を取り戻そうとする心性は、特別な才能を必要とするものでは

ない。私たちは、そうする力を生得的に、本来的に持っているのである。

こうした心性は、人々に愛される神話や物語のキャラクターである「トリックスター」(trickster)の中に見出される。すなわち、自由を象徴する存在である、トリックスターが多く存在しているのである。本研究では、「自由であること」の象徴であるトリックスターについてその特徴を明らかにしながら、ありのままの自分(影)と出会い、統合していく過程におけるトリックスターの重要性に触れていきたい。その際、物語に登場するトリックスターの特徴を先行研究に基づき分類し、その特徴を心の中で活性化されるトリックスター元型の特徴として試論的に同定した上で、その機能についての仮説を生成したい。

2. 物語に登場する人物としてのトリックスター

2.1 世界のトリックスター

トリックスターは「いたずらもの、ペテン師、詐欺師」と呼ばれる存在であり、民話や神話などにしばしば登場し、多くは神的存在として扱われる。アジアのトリックスターとしては西遊記に登場する孫悟空や猪八戒が著名であり、日本ではスサノヲがあげられる。

北アメリカでは、ワクジュンカガが最も有名である。ワクジュンカガは、北アメリカのウィネバゴ・インディアン族に伝わるトリックスターであり、「てぎわがいやつ」を意味する。ワクジュンカガは酋長であり、戦いに出ると言って宴会を開いては、途中で宴を抜け出して女を抱いて寝るといふ、部族の掟を破る行為を繰り返し、周囲を呆れさせた。道中では人間の形にした乾草で野牛を驚かせて殺したり、アシを集めて背負って、道中で出会ったカモたちに「自分は歌を背負っている」と騙し、カモたちが踊るようにしむけ殺す。その一方で、肉を焼いているときに火の番を自分の尻に任せて眠った結果、子キツネに肉を奪われたあげく、自分の尻を責めて、尻を焼く愚行

も犯す。さらに、ミンクとの駆け比べで負けて熊の糞を口に入れられるなど動物から逆襲を受ける場面も多い。ワクジュンカガは最後には天に昇り、地球創造主が住んでいる世界の下にもう1つそっくりの世界を治める存在となる。

ヨーロッパにも多様なトリックスターが存在する。ロキ、ヘルメス、プロメテウスなどがその代表的存在である。アフリカでは、エシュ（ナイジェリア）、トト、セト（ともにエジプト）、トゥレ（スーダン南部）がトリックスターとして扱われる。トリックスターは、動物として描かれることも多く、野ウサギ (hare)、コヨーテ (coyote)、ワタリガラス (raven)、クモ (spider) として様々ないたずらや策略によって騒動を巻き起こしている。

近現代におけるアニメや小説、映画のキャラクターとしては、ブレアラビット（うさぎどん）、バックスバーニー、両津勘吉、コジコジ、ルパン三世、ルフィー、怪盗キッド、ジャック・スパロウ、デッドプールなどが挙げられるだろう。

2.2 トリックスターの特徴

神話に登場するトリックスターのもつ特徴は、(1) 自己中心的である、(2) 変幻自在である、(3) 両義性を有する、(4) 境界を越え、外部とのつながりを持つ、(5) 安定や秩序と相反する存在である（神と対立する）、(6) 文化的英雄になる、という6つに大きくまとめられる。

(1) **自己中心的である** トリックスターは生への衝動が強く、それは食欲や性的欲求の形で現れる。Hyde (1998, 伊藤・磯山・坂口・大島訳, 2005) は、「トリックスター神話はその創造力に満ちた知力を食欲から得ている」と指摘し、ギリシア神話に登場するヘルメスがうそをつくことを始めたのは、腹をすかせて肉を渴望していた時であると述べている。

トリックスターは自分の欲望に従うあまり、守るべき約束をしばしば破る。たとえば、花果山で遊び暮らしていた孫悟空は死にたくないという欲求から仙術を学びに須菩提祖師を訪れたり、天上で蟠桃園の管理を任された時

も食べたいという衝動に負けて桃を食べあさる。Hyde (1998, 伊藤・磯山・坂口・大島訳, 2005) は、コヨーテは魔法の牛を得るがその際に、「この牛を殺してはいけない。腹が減ったら石のナイフで一寸ばかり脂身を切って食べるように」という忠告を受けるが、他の部位を味わいたくなり、牛を殺して全てを失う結末となる。同様のプロットはワクジュンカガの物語にも登場し、球根を食べると排便が促される警告されたにもかかわらず、球根を食べて自分自身の排泄物でおぼれるエピソードでもみられる。

トリックスターは性的行為をするためであればタブーを嬉々として犯す。Carroll (1981, 1984) は、トリックスターに「自己中心的な道化師」(selfish buffoon) というラベルを当てはめている。トリックスターは攻撃衝動も強い。神々の酒宴で、エーギルが何とよい従者をもっていることかと神々がほめた時、ロキはきくにたえず、衝動的にその従者を殺す。Apte (1985) は、トリックスターは性的快楽に対する狂気的な欲求を持っていることを指摘している。

(2) 変幻自在に姿を変える　ほとんどのトリックスターは、どんな物、動物にも変身できる (Apte, 1983)。エジプト神話のセトは特定不能な現存しない動物の姿で表現されるように (Rossini, Schumann-Antelme, 1992, 矢島・吉田訳, 2007)、トリックスターは特定の形をもたない。

トリックスターは実にさまざまな姿に変わる。たとえば、ロキは雌馬に化けて雄馬スヴァジルファリとの間にスレイプニルを産むなど、性別さえ自在に変えられる。ワクジュンカガも同様であり、女装し酋長と結婚し、3人の子どもを産む。孫悟空も蠅やアブのような小生物に変身して偵察やかく乱戦術を行うし (井波, 2007)、マウイも孔雀鳩や鷹といった動物に化けたり、昆虫に化ける。トリックスターは、他者を変化させることもできる。この変幻自在の特徴は、トリックスターの大きな特徴と言ってよいだろう。

(3) 両義性を有する　トリックスターは「愚賢」「善悪」という対立する特徴を両義的に有する存在である。トリックスターは賢くもあるし、愚かでもある。トリックスターは、さまざまな策略を用いて食料を得たり、敵を

殺したりする。Klapp (1954) が「策略に富む英雄」(clever hero) に対する表現としてトリックスターという言葉を用いているように、あの手この手で相手を騙すことをトリックスターは得意にしている。

その一方で愚かさもみられる。Radin (1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974) は、トリックスターは動物よりも愚かになることを論じている。ワクジュンカガは水面に映ったプラムを見て、水中にプラムがなっていると勘違いし、水面に飛び込み岩にぶつかって気を失うエピソードがある。

(4) **境界を超えて外部とつながる** トリックスターは、天界と下界、神の国と巨人の国、現世と冥界などの境界を越える力を持ち、境界に左右されない (Hyde, 1998, 伊藤・磯山・坂口・大島訳, 2005)。孫悟空は筋斗雲にのり冥府や天界を行き来し、ロキは他の神々が簡単には立ち入れない巨人の国に赴く。こうした境界性について、山口 (2007) はジュン族に伝わる野兎を取り上げ、原野と町の間を往復する特徴から「自然」と「文化」の仲介者と述べている。トリックスターの存在によって、他者を通常は越えられない境界に連れていく。その代表的な話として、北欧神話におけるトールとロキの巨人国への冒険があげられるだろう。巨人の王スリュムがトールの槌を盗み、「トールの妻フレイヤを自分の嫁として差し出せば槌を返す」という提案をする。トールは激怒し、ロキはトールをフレイヤに変装させてともに巨人の国に赴く。スリュムの館で2人は歓待を受けるが、トール扮するフレイヤが大量の食事を平らげるのを見て「こんなに大食いの花嫁は見たことが無い」というスリュムに対して、ロキは「フレイヤさまは、八夜の間何も召し上がらなかったのです。それはもう巨人の国をこがれていた」と機転をきかせて、鎚を奪い返すのに貢献する。

Apte (1983) が、ほとんどのトリックスター物語は、彼らの根源的な欲求を満たすための冒険によって構成されていると指摘している。トリックスターは、1つの場所に定住することなく常に移動する存在であり、時には他者をも巻き込んで境界を越えさせる役割を果たすのである。

(5) **安定や秩序と相反する存在である** トリックスターは世界の秩序

を破る存在である。Kerémyi (1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974) は、トリックスターが示す諸要素を1つに要約すると無秩序の精神、限界の敵としての本質であると述べた。こうした点は、セトが、秩序を司るマナートの否定的な対応神であることから示唆される (Rossini, Schumann-Antelme, 1992 矢島・吉田訳, 1997)。

トリックスター物語には、窃盗、強盗、詐欺、強姦など違法行為が登場する。禁忌を犯すことはトリックスターの大きな特徴であり (Makarius, 1993), Ellwood (1993) は、こうした特徴を古代におけるタブーの逸脱として論じている。同様に、河合 (2003) はスサノヲをトリックスターとして取り上げて、常識を破る知恵や行為を通して、既存の秩序に対抗する特徴を指摘している。ワクジュンカガは酋長であったが、酋長は戦にでることはできない決まりなのに「戦いに出る」と言い出す。また、宴会から抜け出して女と寝るが、戦いに出かける男が性交することや、宴会を抜けることも禁止されている。ワクジュンカガは、3つの禁を同時に犯しているのである。また、ロキはアース神達が集う酒宴で神々を口汚く愚弄し、ヘルメスは生まれた次の日にアポロンの牛を盗む。

(6) 文化的英雄となる トリックスターは、強大な敵を倒したり、人間に恵みをもたらし、発明をするため、文化的英雄 (cultural hero) と呼ばれることも多い。文化的英雄とは、「神と人間、自然と文化、混沌と秩序の中間にあり、両者を仲介し、両者の性格を兼備する存在」(山口, 1971) である。山口 (1971) は、ザンデ族に伝わるトゥレを例に出して、他の人間であれば帰ってこれない状況で、何物かを伴って人間と同じ次元に戻ると述べている。

トリックスターは、自分自身の体から食物をもたらす。ワクジュンカガはペニスの先を切り取ってユリやジャガイモ、カブラ、キクイモ、地の豆、カタクリ、シャープクロウ、米に変えた。トリックスターが発明品をもたらす話も多い。ワクジュンカガは頭蓋骨から医療器具を作らせる。ヘルメスは、火を発明する。エシュは太陽や椰子、ピーズを世界にもたらしたといわれる

(山口, 2007). 松本 (1994) は, トリックスター/文化英雄は良い場合も悪い場合もあるが, 新しい物を生じさせ, 世界は変化すると述べている.

トリックスターは望んで英雄となっているのではなく, 結果的にそうなっているだけであるという点が重要である. Radin (1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974) は, トリックスターのもつ神性は二次的なものであり, 「僧侶的思想家, 改作者の解釈である」としている. 篠田 (2008) は自然を文明にするための作業としての技術の発明について述べて, 神話において, 発明はトリックスターによる自然の秩序の壊乱として捉えられると論じている. トリックスターはいわば秩序の再構築を行う存在である. 正しい秩序が“トリックスターによって復活されるのである (Norman, 1990, 高橋, 長浜訳, 1997).

3. トリックスター元型

3.1 元型

「トリックスター」に明確に着目したのは, ユング (Jung) であった. ユングは, 無意識を個人的無意識と集合的 (普遍的) 無意識に分けた. 個人的無意識とは, 個人の体験によって生じた経験が抑圧されて構成される. 集合的無意識とは, 動物や人類に共通する, 太古的な段階の心的状態であり, 原始的な無意識である. ユングは, この集合的無意識には元型と呼ばれる, 人類一般に固有な, 神話類型が含まれていることを理論化した. 元型は, 心理パターンがイメージ化されたものであり, 「老賢者」, 「アニマ」, 「アニムス」, 「グレート・マザー」, 「自己」といった特定のパターンが見いだされる.

河合 (1967) が, 元型はメタファーでしか捉えられないと述べているように, 集合的無意識の中の諸要素があるまとまりを作り, 神話中の人物に象徴されて登場する. これらの元型は, 人類共通の集合的無意識を含むころの本質といえる存在であり, 神話で象徴的に表現されるものであり (Jung, 1936,

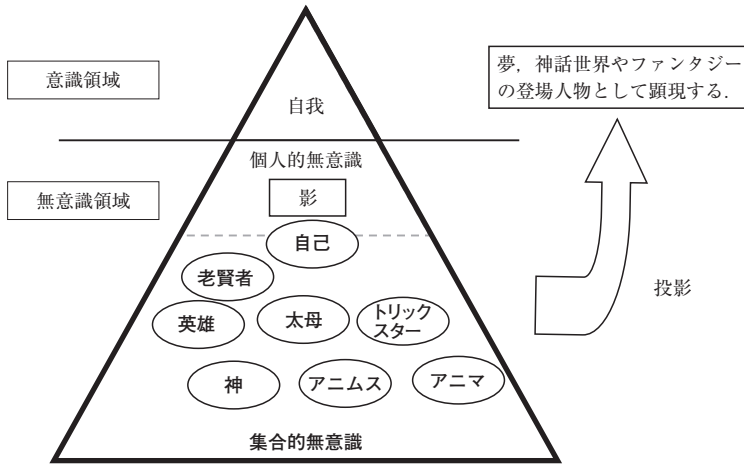


Figure 2 集会的無意識のなかの元型

林訳1999), さまざまな神話や芸術, 夢にそのモチーフが現れる (Figure 2).

元型は, 私たちが無意識の中に有する, 太古から培った潜在的な可能性を示し, 私たちの行動や, イメージ, 意識のスタイルの中に現れる (Hilman, 1975入江, 1997). ユングは, トリックスターが明らかに, ひとつの最も古い元型的な心の構造 (心理素) であるとして着目した (Jung, 1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974). 最も古いというのは原始的であり, 残虐で, 倒錯的であり, 淫猥であり, 破滅的であることを意味する. 前述したように, トリックスターを構成する諸要素は, (1) 自己中心的である, (2) 変幻自在である, (3) 両義性を有する, (4) 境界を越え, 外部とのつながりを持つ, (5) 安定や秩序と相反する存在である, (6) 文化的英雄になる, ことである.

トリックスター物語は異なる地域・文化で作りあげられたにもかかわらず, こうした原始性, すなわち欲望の強さ (特に性欲) や残虐, 倒錯的な行動傾向に興味深い類似がみられる. 北欧のロキと古事記のスサノヲの類似や, ナイジェリアに伝わるエシュとカンボジアの野ウサギの類似などが挙げ

られる。こうしたモチーフの類似は、トリックスターを元型として扱う根拠となる。ユングは、トリックスターがあきらかに、ひとつの最も古い元型的な心の構造（心理素）であるとして着目した（Jung, 1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974）。トリックスター元型は、原初的で存在であると同時に、その特徴ゆえに意識上に上ることは非常にまれであり、活性されづらいものであるといえる。

3.2 影の統合

すでに述べてきたように、我々の意識（自我）は、それまでの経験や教育などの累積によって、価値体系を形成している。影（shadow）は、われわれの性質の暗い部分であり（Jung, 1964, 河合監訳, 1975）、社会的常識や価値体系に合わない性格や欲求が影とり、個人的無意識の中に抑圧される（河合, 1967）。影は自我のまったく知らないあるいは、あまり知らない属性を示す（von Franz, 1964, 河合監訳, 1975）。好きなファッションを着たいという欲求を持っていても、校則によって禁止される場合、着飾りたいという気持ちは影として無意識下に抑圧される。

自我が望まぬ形で意識上に現れた元型は、しばしば影となりやすい。たとえば、男性にとって、女性性（アニマ）は影となり、女性にとって男性性（アニムス）が影となる。影は悪いものではなく、一つの統合された心を獲得していくためには、その存在は非常に重要になる。意識は、一度は元型的な本能の基盤からはずれ、それと対立するが（Jung, 1936, 林訳, 1999）、自分自身との出会いはまず影との出会いとして経験される。影は、その時点で認められない自分自身の特性であるため、自己（self）もまた最初は影として自我と対立することとなる。

影は人々の行動にさまざまな形で影響を及ぼす。たとえば、von Franz (1964, 河合監訳, 1976) は、女性の影であるアニムス（男性性）を取り上げ、「無意識の人格化されたもののひとつが、われわれの心をとらえるときは、あたかもわれわれ自身がそのような考えをもっているかのようになる」と論

じ、自我がそれらと同一化すると述べている。「無意識からの像によって“とりつかれている”」状態 (von Franz, 1964, 河合監訳, 1976) であり, これは影の同一化 (identification) と呼ぶべき現象である。同様に, トリックスター元型に関して, 河合 (1987) はこうした影への同一化に類似する現象を述べており, 治療者が無意識のうちにトリックスターの役割を取らされてしまうことを報告している。

生活の中で何らかの障害に出会い, 生き方に違和感が生じるときがある。その違和感の原因を探し回り, その結果, 心の中で疎外されていた影である自己に出会う。自己 (影) は, 無意識的な要素を含み, 時に, 欲動的で衝動的, 体系的価値に反する欲求や感情をもたらすため, その出会いは喜びに満ちたものとは限らず, 葛藤や苦悩を生み出し, 自己否定や自己嫌悪を強める危険性がある。

影を認めることは, 統合された人格を形成していくうえで非常に重要である。たとえば, von Franz (1964, 河合漢訳, 1975) は, 人格を傷つけられ, それに伴う苦悩によって個性化過程 (individuation process) は始まり, 影を自覚することで個性化過程は進むと述べている。個性化過程とは, 全体性をもった自己の統合を目指すことであり, ユング (Jung, 1944, 池田・鎌田訳, 2017) は, 個性化過程を象徴するものとして錬金術を取り上げ, 自我と自己の統合の場を聖域と呼び, 個性化過程の象徴として10枚の図版である「賢者の薔薇園」を取り上げている。影との対立について, ユングは錬金術では「最終的には緒対立の一致へ, 聖婚, 「化学の結婚」という元型的形態における緒対立の結合へと通じる」と述べ, 錬金術の眼目と論じた。

4. 影の統合におけるトリックスターの役割

4.1 中間領域

影と向き合い, 統合に至るプロセスが行われる精神内の領域を, 中間領域

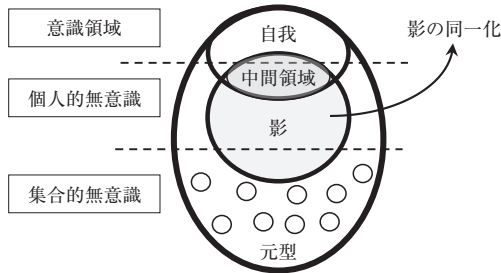


Figure 3 中間領域のイメージ図

と呼ぶ (Figure 3)。この中間領域は、ユングが述べる錬金術における容器に相当し、聖域と同義である。中間領域は、その内容物や変化が外部に漏れないように守られなければならない。

自我が弱まるような出来事や、無意識が活性化するような状況下において、自我は意識の境界を超えて無意識に向かうと同時に、影（自己）は意識境界を越え、部分的に気づき体感できる状態になる。いわば自我と影（自己）がまじりあう精神的な領域が中間空間といえる。その場において、無意識領域に潜在する影（自己）が意識領域にその姿を現し、自我は本来許されない本能的で欲深い自分に気づくのである。それは、探していた自分を見つけるような感動を伴うこともあるし、あまりにも自分自身がこれまで築いてきた価値観を切り崩すものであるゆえに恐怖や不安を生み出すこともある。

4.2 トリックスター元型の役割に関する仮説

影との統合の過程は葛藤が非常に強く、不安定な状態に陥る可能性があるが、その際、集会的無意識における元型が、影を統合する過程において様々に作用すると考えられる。集会的無意識は、心の統合過程において無干渉であるわけではなく、自我と独立して自律的に働く存在である。とくに、元型の一つであるトリックスター元型は、中間領域の創出および維持に寄与すると仮定される (Table 1)。

私たちの集会的無意識にあるトリックスター元型は、規範や良心の力を受

Table 1 影の統合過程におけるトリックスター元型の働きに関する仮説

| トリックスターの人格的特徴 | 影の統合過程におけるトリックスター元型の働き |
|---------------|--|
| 1. 自己中心的である | 規範や現実から離れて自身を第一に考える状態になる。他者を重視しすぎる思考から脱する。 |
| 2. 境界を越える | 自我が無意識に触れることを促す（中間領域の発展）。欲求や自分の願いに気づく余地を増やす。 |
| 3. 両義的である | 価値観と違う自分（影）を否定せずに受け入れる。自我の中に影を取り入れることを拒否しない。 |
| 4. 秩序と相反する | 超自我や規範意識に反することを考えたり、感じたりすることへの罪悪感を抑える。 |
| 5. 変幻自在である | 自我の変容を促す力を持つ。新しい自分に気づいたときにそれを受け入れて変わっていく。 |
| 6. 文化的英雄となる | 新しい自己への理解を達成したり、より生きやすい新たな価値を創造する。 |

けず、無罰的な中間空間を作り出すことが可能になるだけでなく、その中間領域を維持し、自我と影の統合においてその力を発揮すると想定される。トリックスター元型が活性化されることでいくつかの特徴的な心的変化が生じると考えられる。以下にそれぞれ考察を行う。

トリックスター元型が活性化することによって、第1に、その個人は自分を中心に考えることができるようになる。それは、自己中心的になるということであるが、言い換えれば、他者を重視しすぎる思考から脱することである。こうあるべきという規範や現実から離れて自分自身を第一に考える状態につながる。他者志向的な思考から離れ、自己志向的な思考へとシフトしていくことは、自分の本来的な欲求に気づき、それを開放する上で非常に重大な一歩となる。その意味で、他者を優先して自分の気持ちを我慢する程度が強くなったとき、トリックスター元型が活性化する素地が生じるといえる。

第2に、その個人は越境性を得て、自分が作ったスキーマ（認知枠）や固定的な思考から離れることが可能となる。このことは、中間領域への入ることが可能になることを示唆し、その中で、欲求や自分の願いに思いをはせながら、自我が無意識に抑圧された、十分に意識されていない影に触れること

が可能になる。トリックスター元型が活性化されることによって、意識的にコントロールできる精神世界から離れ、未知でありコントロール不能な無意識へと深化していく流動的でダイナミックな心の動きが生み出されるのである。

第3に、その個人は両義的な思考が可能になる。すでに見てきたように、トリックスターは善悪の価値判断をもたない。トリックスター元型が活性化することで、自分が持っている価値観と違う価値観を平等に見る態度が強まる。その態度によって、自分を否定せずに受け入れることが可能になり、自我の中に影を取り入れることを拒否しない、無罰的で柔軟な内的対話につながっていくと考えられる。換言すれば、自分の中にある、いわゆる悪とされる部分を拒否しない状態となる。それは、自分が普段持っている価値観から外れる自分に出会ったときに、「こういう自分がいるのも楽しい」、「こんな風に考えるのも悪くはない」と思えることが、ある種トリックスター元型に基づく自己受容的思考である。

第4に、その個人は秩序と相反することが可能となる。自我が中間領域で影と接するとき、「こうあるべき」という規範的思考がそれを止めるよう作用する。なぜならば望ましく価値観のために抑圧された影は、社会的な適応のためには認識されないほうが良いと判断されるためである。トリックスター元型の活性化によって、常識や価値観を疑う心的状態を生み出し、自我を縛る規範の働きを弱める。超自我や規範意識に反することを考えたり、感じたりすることへの罪悪感を抑える、脱秩序的思考が可能になると考えられる。

第5に、その個人は、変幻自在となる。この特徴によって、特定の価値観や思考の方向性に固定化された自我の変容を促す力につながる。こうあるべきという固定化された自己概念や、考え方を変化させる可能性であり、新しい自分に気づいたときにそれを受け入れる素地となる。

第6に、その個人は文化的英雄となる。トリックスターは、世界に新たな発明や文化をもたらすが、トリックスター元型がもたらすのは心的世界にお

ける新たな価値や認知的枠組みである。中間領域において自我と影の対峙することを通して、既存の価値観から抜けて、影との無罰的な対話をする。それは、新しい自分の一側面への理解を達成したり、より生きやすい自分を得る可能性を高める。これらは、自分がより生きやすい秩序を作り出すという英雄的な役割を果たすといっただろう。

5. まとめ

本論文では、トリックスター元型に着目し、影の統合の過程でどのような働きをするかを試論的に検討した。影を認め、それを意識化していくということは自我が形成する価値観の転換になるため、大きな苦痛となる。現代では、社会的な規範やルールが内在化される頻度や程度は多い。私たちが生きていくうえで多くの規範やルールを守る必要があることは言うまでもない。ただし、それを真面目に守ろうとするばかりに、自分自身を制約で縛り、自由を手放し、呼吸することさえ困難になる人は多い。こうした現代だからこそ、脱秩序の特徴を有するトリックスター元型の役割が大きな意味を持つのではないかと考えられる。

自分自身を自由にする中間領域を心の中に持ち、自分の中の影を認めて少しずつ統合していくプロセスは、一人の人間として生きていくうえで、最終的にはより全人格的な個性化過程へとつながっていく点で重要となる。そのプロセスを支えるのが集合的無意識に存在する様々な元型であり、本研究では特にトリックスター元型が、中間領域の存在を維持し、自我と影が統合するプロセスの助けとなる可能性について考察した。

その際、トリックスター元型が投影された、神話や物語の中で描かれたトリックスターの特徴を先行研究 (Klapp, 1954, Carroll, 1981, Apte, 1985, 山口, 2007など) からまとめた上で、そうした特徴に基づき、トリックスター元型がこころの中で果たす役割について同定を試みた。そのなかで、トリックスター元型は、自我が無意識へと進む過程を助けながら、自己志向的思

Table 2 トリックスターに関する概念の整理

| 概念 | 定義 | 特徴 |
|-----------|--|---|
| トリックスター | 世界各国の神話、寓話、小説、アニメなどの文化的作品に見られる、道化の特徴を持つキャラクター。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的 ・性欲が強い ・攻撃的である ・反秩序的である ・変幻自在 ・文化的英雄となる |
| トリックスター元型 | 集合的無意識の中に含まれる心的パターンである。元型として自律的に働き、意識的な統制は不可能な存在である。 | <ul style="list-style-type: none"> ・欲動の活性化 ・超自我の抑制 ・反秩序的行動 ・価値観の変容 |
| トリックスター心性 | 自我によって意識化された、脱秩序的で開かれた思考・行動様式である。意識的な統制が可能である。 | <ul style="list-style-type: none"> ・柔軟視 ・開放性 ・創造性 ・ユーモア |

考、自己受容的思考、脱秩序的思考を促す役割を試論的に考察した。この点については、さらなる理論的考察や臨床的实践に基づく検証が必要である。

トリックスター元型は、善悪の観念をもたない自律的な存在であるため、時には影として暴走する可能性もある。たとえば、河合(1987)は、道化が破壊的な行動が堅調になった例として、「オセロ」の悪役イマージョを挙げている。河合(1994)が、トリックスターの破壊力が強いときは、それは古い秩序を壊すのみではなく、新しい建設の可能性まで根こそぎ奪ってしまうと述べているように、統制されないトリックスター元型の暴走は時として非常に破壊的に作用する。

トリックスター元型の破壊的な力を創造的・治療的に生かしていくためには、可能な限りその存在や力を意識化していくことが求められる。それは自我の中にトリックスターを宿すということである。換言すれば、トリックスター心性を獲得すると言っても良いだろう。トリックスター元型を昇華し、意識化していく作業は、「トリックスター心性の獲得」と呼ぶことができる(Table 2)。トリックスター心性の獲得は、環境の変化に柔軟に対応できる

態度や、ユーモア、開放性の獲得につながる。開放性を有する個人は、(1) 刺激希求、(2) 批判的思考、(3) 共感的態度、(4) 自己開示/自己主張といった対人的行動・態度および(5) 自己の内面への気づきといった特徴を有することが論じられている(葉山, 2014)。また、ユーモアを有することはストレスを緩和させる効果がある(葉山・櫻井, 2005に詳しい)。トリックスター元型の意識化を通して、トリックスター心性を獲得することは、こうした行動の原動力となり、実際の生活の中で強みとして発揮されるのである。

こうしたトリックスター心性の獲得がどのように進むのか、今後は検討が必要であろう。トリックスター物語のいくつかは、トリックスターが成長していくという特徴を示している。当初ワクジュンガカは自分自身の欲求に従って原始的にふるまうが、徐々に人格は統合されていき、社会的な目的を持った人物へと変貌を遂げていくことが指摘されている(Norman, 1990, 高橋・長浜訳, 1997)。こうしたワクジュンカガの変容についてJung (1956, 皆河・高橋・河合訳, 1974)は「文明化の過程(中性化の過程)である」と述べている。

トリックスターが中性化されていくプロセスは他のトリックスター物語でもみられる。たとえば、西遊記の孫悟空は、最初は悪さばかりする石ザルであったのが、取経の旅を通じて成長を遂げていく。今後は、トリックスター物語のなかでトリックスター的な感情や欲求がコントロールされていく過程(中性化の過程)にも着目し、そうした過程が進行する中でどのようなことが起こっているのかを分析することが必要であろう。今後の課題としたい。

引用文献

- Apte, M.L. (1983). Humor Research, Methodology, and Theory in Anthropology. In P.E. McGhee & J.H. Goldstein (Eds.) *Handbook of Humor research Volume 1 Basic Issues*, Springer-Verlag: New York.
- Apte, M.L. (1985). *Humor and laughter* Cornell University press: Ithaca and London.

- Carroll, M.P. (1981). Levi-Strauss, Freud, and the trickster: a new perspective upon an old problem, *American Ethnologist*, 8, 301-313.
- Carroll, M.P. (1984). The Trickster as selfish-buffoon and culture hero. *Ethos*, 105-131.
- Ellwood, R.S. (1993). A Japanese mythical trickster figure: Susa-no-o In W.J. Hynes & W.G. Doty (Eds.) *Mythical Trickster Figures Contours, Contexts, and Criticisms*. The University of Alabama Press: Tuscaloosa, Alabama.
- Freud S (1923) *The Ego and the Id*. London: Hogarth Press. (フロイト, S.) 井村恒郎・小此木啓吾訳 (1970): 自我とエス フロイト著作集6 人文書院.)
- Fromm, E. (1941). *Escape from freedom*. New York: Farrar & Rinehart (フロム, E. 日高六郎訳 (1956). 自由からの逃走 東京創元社.)
- 葉山大地 (2014). 教師に求められる資質としての開放性に関する考察 中央学院大学人間・自然論叢, 39, 129-144.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2005). ユーモアのストレス緩和効果に関する研究の動向 筑波大学心理学研究, 30, 87-98.
- Hyde, L. (1998). *Trickster makes this world* New York: Farrar, Straus and Giroux (ハイド, L. 伊藤誓・磯山甚一・坂口明德・大島由紀夫訳 (2005). トリックスターの系譜 法政大学出版局.)
- 井波律子 (2007). トリックスター群像 中国古典小説の世界 筑摩書房.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- Jung, C.G. (1936). *Der Begriff des kollektiven Unbewußten* Zürich: Rascher Verlag (ユング, C.G. 林道義訳 (1999). 集合的無意識の概念 元型論 紀伊国屋書店.)
- Jung, C.G. (1944). *Psychologie un Alchemie* Zürich: Rascher (ユング, C.G. 池田紘一・鎌田道夫訳 (2017) 心理学と錬金術 新装版 人文書院.)
- Jung, C.G. (1951). Zur Psychologie de Kind-Archetypus In K.Kerényi & C.G. Jung (Eds) *Einführung in das wesen der mythologie*. Gerstenberg: Gebrueder (ユング, C.G. 杉浦忠夫訳 (1971). 神話学入門 幼児元型の心理学のために 晶文全書.)
- Jung, C.G. (1956). On the Psychology of the Trickster Figure In P. Radin, K. Kerényi, & .C.G Jung (Eds). *The Trickster-A study in American Indian Mythology*. London: Routledge & Kegan Paul (ユング, C.G. 皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳 (1974). トリックスター トリックスター像の心理 晶文全

書.)

- Jung, C.G. (1964). Approaching the unconscious, In C.G. Jung, M.L. von Franz, Joseph L. Henderson, Jolande Jacobi, Aniela Jaffe' (Eds). *Man and his symbols*. London: Aldus Books Limited. (ユング, C.G. 河合隼雄監訳 (1975). 無意識の接近 人間と象徴 無意識の世界・上 河出出版新社.)
- Kerényi, K. (1956). The Trickster in Relation to Greek Mythology In P. Radin, K. Kerényi & C.G. Jung (Eds). *The Trickster-A study in American Indian Mythology*. London: Routledge & Kegan Paul (ケレーニイ, K. 皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳 (1974). トリックスター 神話的あとがき —ギリシア神話とトリックスター 晶文全書.)
- Klapp, O.E. (1954). The clever hero. *Journal of American Folklore*, 67, 21-34.
- 河合隼雄 (1987). 影の現象学 講談社学術文庫.
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門 培風館.
- 河合隼雄 (1994). 昔話の深層 ユング心理学とグリム童話 講談社+α文庫.
- 河合隼雄 (2003). 神話と日本人の心 第7章サノヲの多面性 岩波書店.
- 松本一男 (1994). トリックスター・文化英雄 大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松本一男 (編) 世界神話辞典 角川書店 pp.203-224.
- Makarius, L. (1993). The myth of the trickster: The necessary breaker of taboo In W.J. Hynes & W.G. Doty. (Eds). *Mythical Trickster Figures Contours, Contexts, and Criticisms*. The University of Alabama Press: Tuscaloosa, Alabama.
- Norman, D. (1990). *The Hero: Myth/Image/Symbol, Anchor Books*. New York: Anchor. (ノーマン, D. 高橋進・長浜麻里子訳 (1997). 英雄 神話・イメージ・象徴 竹内書店新社.)
- Radin, P. (1956). The Nature and Meaning of the Myth In P. Radin, K. Kerényi & C.G. Jung. (Eds). *The Trickster -A study in American Indian Mythology*. London: Routledge & Kegan Paul (ラディン, P. 皆河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳 (1976). トリックスター 神話の特質と意味 晶文全書.)
- Rogers, C. (1961). Ellen West-and Loneliness. *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, Vol.1, No2, 94-101. (ロジャーズ, C. 伊東博・村山訳, (2001). ロジャーズ選集 (上) カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文. 第11章 学習を促進する対人関係 誠信書房.)
- Rossini, S., Schuman-Antelme, R. (1992). NEtER, Dieuxd'Egypte, Trsmegiste (ロッシーニ, S. シュマン=アンテルム, R. 矢島丈夫・吉田春美訳 (2007). 図説 エジプトの神々辞典 (新装版) 河出書房新社.)

- 篠田知和基 (2008). 世界動物神話 第3部 トリックスター 八坂書房.
- 山口昌男 (1971). アフリカの神話的世界 岩波新書.
- 山口昌男 (2007). 道化の民俗学 岩波現代新書.
- von Franz, M. L. (1964). The process of individuation, In C.G. Jung, M.L. von Franz, Joseph L. Henderson, Jolande Jacobi, Aniela Jaffe' (Eds). *Man and his symbols*. London: Aldus Books Limited. (フォン ロレンツ, M.L. 河合隼雄監訳 (1975). 個性化の過程 人間と象徴 無意識の世界・下 河出出版新社.)